

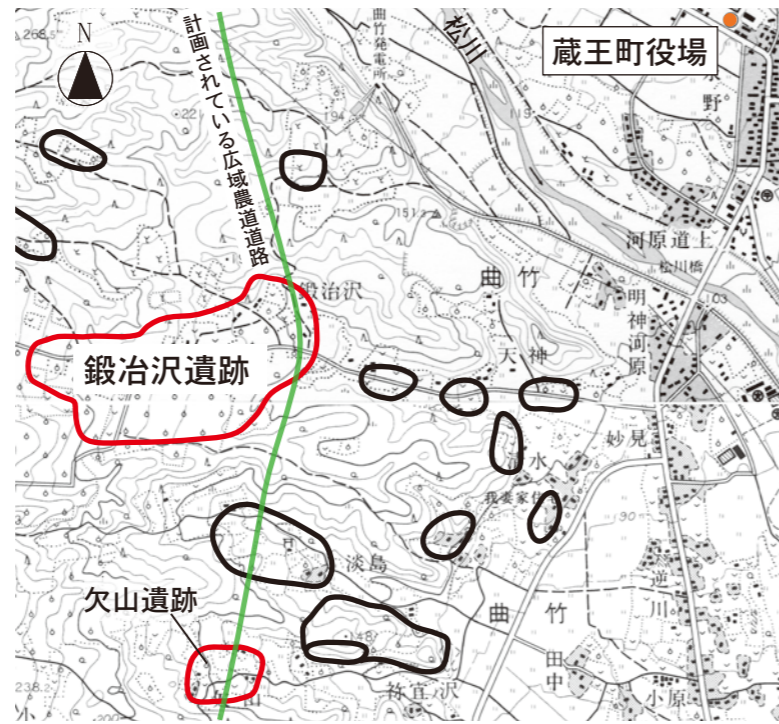
蔵王町 鍛冶沢遺跡

平成20年度発掘調査現地説明会

平成20年9月13日(土)午前10時30分～

《調査要項》

- 遺跡名 鍛冶沢遺跡(かじさわいせき)
- 所在地 蔵王町曲竹字鍛冶沢
- 調査主体 宮城県教育委員会
- 調査担当 宮城県教育庁文化財保護課
- 調査理由 広域営農団地農道整備事業「仙南2期地区」
- 調査期間 平成20年5月25日～10月10日(予定)
- 調査面積 約2,000㎡
- 調査協力 宮城県大河原地方振興事務所、蔵王町教育委員会



第1図 鍛冶沢遺跡の位置

1. はじめに

「コスモスライン」の名で呼ばれている広域農道(白石川崎線)は、すでに白石市深谷地区と蔵王町下別当地区間で開通しており、現在は蔵王町曲竹地区において整備事業が進められています。この道路建設予定区域内には、今回調査を行っている鍛冶沢遺跡をはじめとする遺跡群が分布していることから、工事により遺跡に影響が及ぶ範囲を対象に発掘調査を行っています。

2. 遺跡の立地と周辺の遺跡(第1図)

鍛冶沢遺跡は蔵王町曲竹字鍛冶沢に所在し、青麻山の裾野にある小丘陵上に立地しています。青麻山の裾野は本谷もの沢が入り、東西に延びるいくつかの小丘陵が形成されています。この小丘陵に鍛冶沢遺跡をはじめとする各時代にわたる遺跡が多数分布しており、蔵王町内でも遺跡の分布密度の高い地域となっています。

鍛冶沢遺跡は、古くから遺物が豊富に出土する遺跡として中央の学会で注目されてきた遺跡で、完全な形の土偶(仙台市博物館所蔵)が出土した遺跡としても知られています。

昭和44年には遺跡の一部が開田される事となり、宮城県教育委員会が発掘調査をしました。その結果、縄文時代終末期の土器・石器などが多く出土し、当時の紙面を賑わせました。

また、周辺の遺跡には、縄文時代早期の遺跡である明神裏遺跡や中・後期の住居跡が多数発見された二屋敷遺跡、後・晩期の大規模な集落と推定される下別当遺跡・山田沢遺跡、弥生時代の清水遺跡などが知られ、古くから人々の生活の場であったことがうかがわれます。

3. 発見された遺構と遺物

調査は、平成19年度から継続して行っています。県道の路線敷(全長約400m)を対象とする範囲を、地形や道路によって5つの調査区(I～V区)に分け、昨年度は調査対象範囲の南側部分(I区・II区)について調査を行いました(第3図)。

このうちII区では、縄文時代の掘立柱建物跡群(写真3)と『再葬墓』と呼ばれる弥生時代のお墓が発見されました。

今年度は南側(I区南、II区、III区)と北側(IV区、V区)について調査し、縄文時代の住居跡や集石遺構、陥穴などを発見しました。また、II区については掘立柱建物跡を継続調査しています。以下、調査区ごとに概要を述べます。

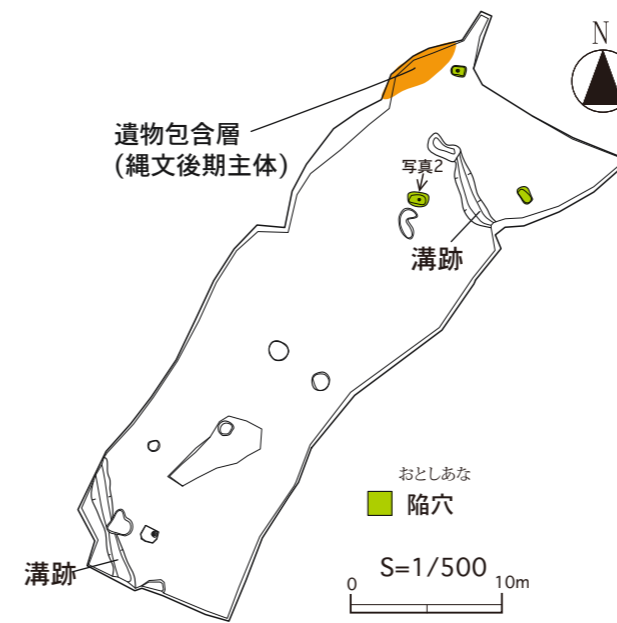
【I区南】I区南では土壌6基(陥穴3基)、溝跡2条などを発見しました(第2図)。遺物は縄文時代後期を中心とする遺物包含層(二次堆積)から土器、石器、勾玉(写真1)などが発見されました。



写真1 I区南出土勾玉



写真2 縄文時代の陥穴(北から)



第2図 I区南の遺構配置



第3図 遺跡周辺地形と調査区の位置

【Ⅱ区】昨年度の調査で発見した建物跡群を、柱穴を掘り下げて検討した結果、4～5棟の掘立柱建物跡が同じ場所に何度も(多いもので8回)建て替えられていたことがわかりました。建物は平面形が一辺3～5mの正方形で、4本の柱で建てられています。柱の直径は、20～30cmのものが多く、中には40cmほどのものもありました。また、柱を立てるために掘った穴には柱を固定するために礫を入れているものもあります。

掘立柱建物跡の柱穴から後期後葉～晩期中葉の土器が出土(中心は大洞BC～C1式)していることから、建物跡は、縄文時代晩期中葉頃(約2700～2600年前)に建てられたと考えられます。



写真3 掘立柱建物跡群(南東から)

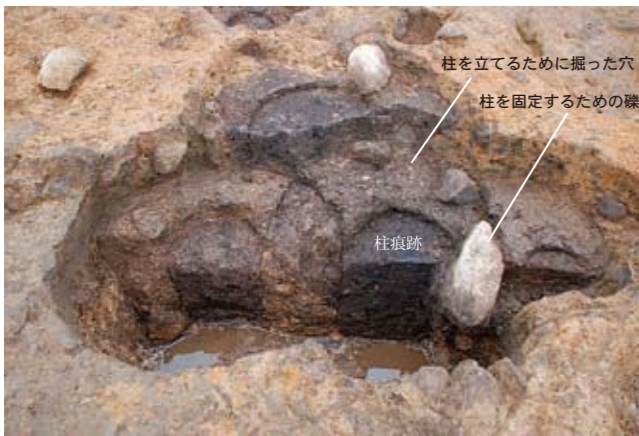
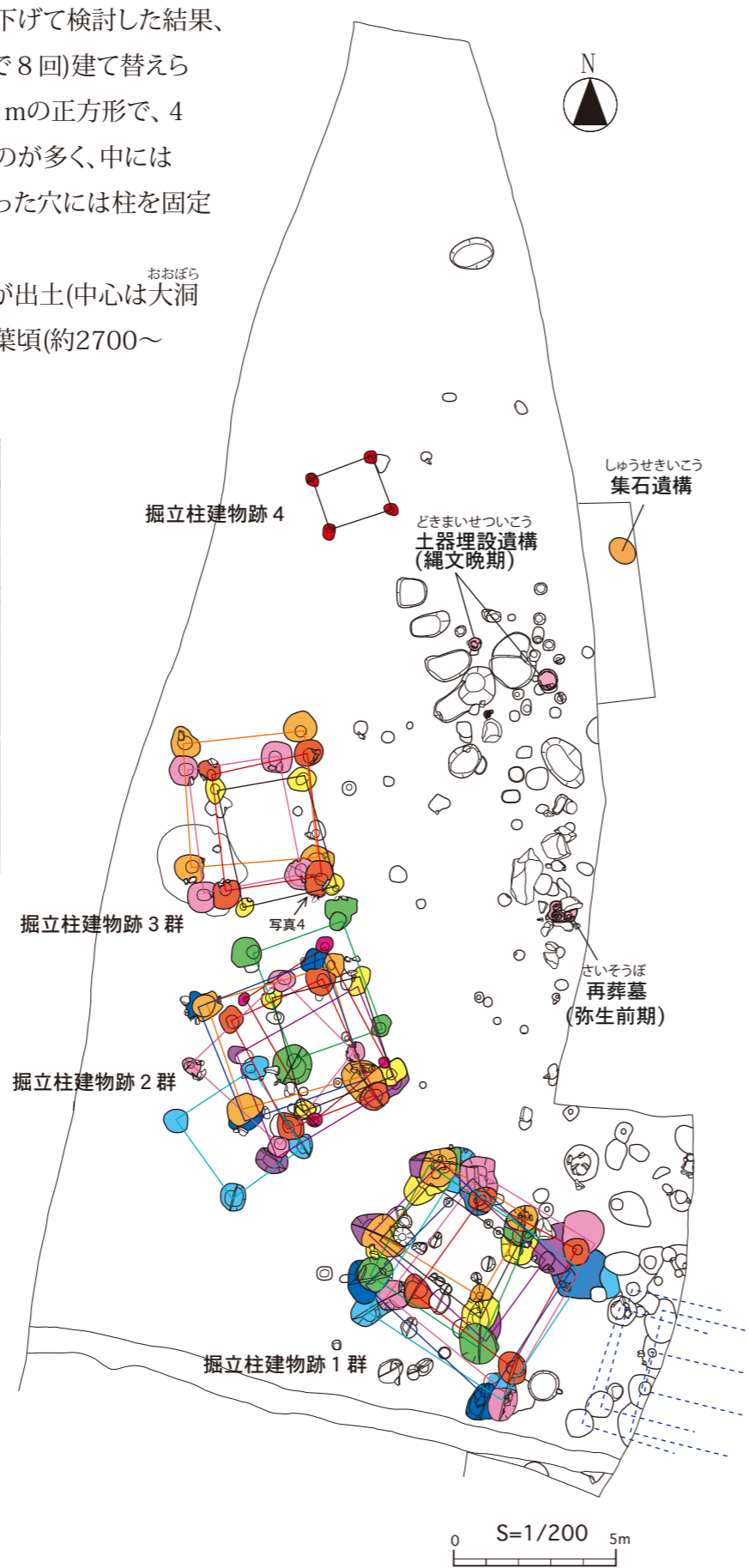


写真4 掘立柱建物跡3群の柱穴断面(南から)



写真5 集石遺構(北から)



第4図 IV-4区遺構配置図

また、東側で集石遺構を発見しました(写真5)。平面形が長径1.2m、短径0.8m程の楕円形で、中央付近に角のない川原石を据え、その周囲に角礫を集めています。周囲から再葬墓や土器埋設遺構など縄文時代晩期から弥生時代前期(約3000～2200年前)の墓跡が発見されていることから、集石遺構もこの頃の墓跡と考えられます。

【Ⅳ区】Ⅳ2・3区は遺構の発見はありませんでしたが、かつて沢があったところの堆積土から縄文時代から古代にかけての土器が出土しました。

Ⅳ-4区では、北側から竪穴住居跡1軒(縄文時代中期～後期前葉)、中央部で陥穴と溝跡1条を検出しました。南側からは近世以降の建物跡などが見つかりました。

Ⅲ区、Ⅳ-6区、Ⅴ区では遺構は発見されませんが、Ⅲ区とⅣ-6区の間が昔は沢であったことが土の堆積状況からわかりました。

4.まとめ

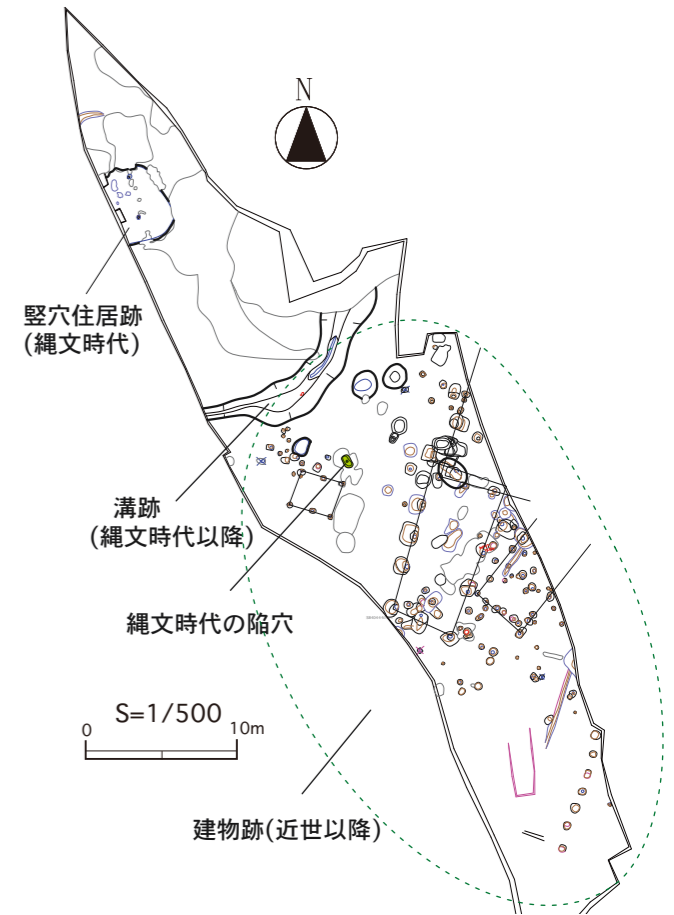
①Ⅳ区で縄文時代の竪穴住居跡1軒、Ⅱ区で掘立柱建物跡群と集石遺構、Ⅰ区南とⅣ区で陥穴などを発見しました。

②Ⅱ区では当時の一般的な住まいである竪穴住居跡は存在せず、『掘立柱建物跡だけが何度も建てられた場所』と『再葬墓や土器埋設遺構、集石遺構など墓跡と考えられる遺構が集中する場所』が見つかりました。こうした理由については現在検討中ですが、当時の集落の様子を知るうえで貴重な発見です。

掘立柱建物: 地面に掘った穴に直接柱を埋めて建てた建物。遺跡で見つかる建物跡の柱材はほとんどの場合残っておらず、土の違いで痕跡としてわかる場合が多い。柱を抜いたり、切り取った痕も見られることから、再利用される場合もあったと考えられる。

竪穴住居: 地面を掘り下げて床を造った住居。時代や地域によって様々な形がある。

再葬墓: いったん葬った遺体の骨を集め、壺に納めて埋葬したお墓。弥生時代を中心に北関東や南東北で多くみられる。



第5図 IV-4区遺構配置図

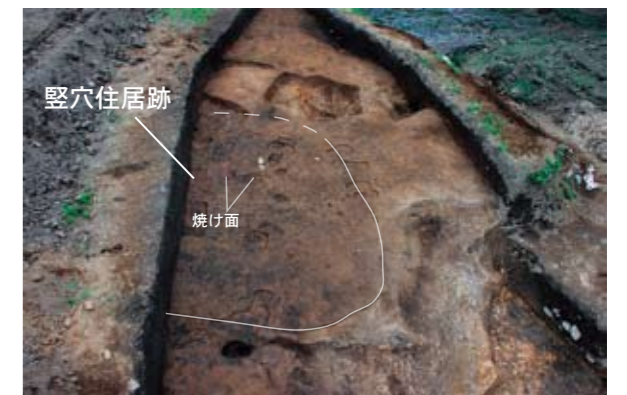


写真6 IV-4区SD4001竪穴住居跡(南から)



写真7 IV-2・3区沢跡出土縄文土器、弥生土器